

序

薬理学とは、その名の通り、薬の理（ことわり）を研究する学問である。薬はなぜ効くのか、なぜ有害作用が出るのか、それを防ぐにはどうしたらいいのか、どう対応すべきかを明らかにするものである。

医学の進歩・新薬の開発に伴って薬物治療も大きく変化している。厚生労働省に認められた薬価収載医薬品（病院で使う医薬品）は、1万3,000品目（2023年8月時点）に及ぶため、治療薬すべてに詳しくなることはおよそ不可能である。そのため、まずは、薬理学の基本的な考え方を総論において学ぶとともに、よく使われる薬について、各論でしっかりと知識を身につけることが重要である。本書も「総論」と「各論」の二部構成となっている。臨床で必要とされる薬物相互作用、特に食事成分の影響などは、個々の薬で理解することも大切であるが、基本となる原則ルールを知ることによって応用できるようになる。本書では、総論を大事にしているが、それは応用力を身につけてほしいとの願いからである。また、「総論」↔「各論」、「各論」↔「各論」など、参照先を多く掲載しているのも特徴である。参照先をあたることで、ばらばらの知識が自然につながり、理解が深まっていくはずである。

本書の制作にあたっては、学生さんが自ら勉強し続けたくなる（＝「気づき」を促す）薬理学の教科書を目指した。執筆は、薬理学研究教育の第一線でご活躍されている多くの先生方に参画いただいた。ただ単に薬理作用や有害作用を記載するだけではなく、将来、臨床の現場において役に立つ知識をできるだけわかりやすく、イメージしやすい図表を使いながら解説いただいたので、臨床に出てからも参照できる内容となっている。「難しい」と苦手意識をもたれがちな薬理学であるが、側注に有害作用のイラストや薬の名前の由来などを載せて、できるだけ記憶に残るよう工夫しているので、ぜひあわせて見ていただきたい。

医療従事者となる学生の皆さんが、これから長く付き合うことになる薬と向き合ううえで、本書が“薬理学”の楽しさを知るきっかけになればと願っている。本書の制作にあたり、ご尽力いただきました多くの先生方、そして本書の企画段階から完成まで、根気強く丁寧に支えていただきました羊土社の杉田真以子氏、金子葵氏、望月恭彰氏に心より感謝申し上げます。

2023年10月

柳田俊彦